

はじめに

ウラディミール・ホロヴィッツは「レコード」が実用化されたのと同時期にアメリカにデビューし、CDが普及した頃に亡くなった。演奏会に出なくなる空白期が何度もあるが、その間もレコーディングはしていたので、まさに「レコードのピアニスト」だった。

一方で、一九八三年の日本公演のチケット代が五万円という、オペラよりも高い価格だったことが示すように、演奏会を熱望される、「ライヴのピアニスト」でもあった。幸いなことに、生涯の後半は、多くのリサイタルがライヴ録音されている。

というわけで——ホロヴィッツの演奏は、初録音の一九二八年から亡くなる一九八九年までの六十一年間分を聴くことができる（ピアノロールへの録音は一九二六年から）。その録音は、録音スタジオや自宅でのセッション録音と、リサイタルのライヴ録音、オーケストラと共演した協奏曲の放送音源など、さまざまな録音方法によって遺されたもので、大半がCDとして市販されている。

長い活動期間の割には、ホロヴィッツの録音は、その全貌が比較的簡単に把握でき、私のように、「コレクター」とまではいかない程度のファンでも、そのほぼ全てのCDを集めることができるのだ。

そこで、ホロヴィッツの生涯を辿りつつ、その時々々の演奏の録音を明記していく、物語としての「伝記」と演奏・録音の「記録」とを融合させる本を作ってみた。

この本の前段階として、『ホロヴィッツの遺産』という本がある。

世界有数のホロヴィッツ・コレクターである石井義興氏が、自身のコレクションを本にしたいと私のもとに相談にいられたのは、二〇一三年の秋だったと記憶している。

石井氏はホロヴィッツのファンになると、世に出た全てのホロヴィッツのレコード（SP、EP、LP、CD、映像）を集めようと決意し、達成した方だ。

単に、「全ての録音」を集めただけでなく、同じ内容のLPでも国によってジャケットのデザインが異なるので、全ての国のものを集めるとか、コンピレーションアルバムで、ホロヴィッツの録音が一曲でも収録されているものも集めるとか、とにかく、「ホロヴィッツの演奏」が収録されている音盤のほぼ全種類をお持ちなのだ。なかにはロシアとか中国で出ている権利関係が怪しげなものまである。

そのコレクションを全て写真に撮るから、それを集成した写真集を作りたいという相談だった。その本は二〇一四年秋に、石井氏とその協力者である木下淳氏の共著『ホロヴィッツの遺産』として、アルファベータブックスから出版された。

その後も石井氏と話す機会があり、「『ホロヴィッツの遺産』は高額となってしまい、多くの人が手

に取ることができなかつたので、ホロヴィッツの録音遺産の全貌が分かる、手軽な本を作れないか」という話になった。

こうしてできたのが、この本である。

伝記部分は私がかつて書いた『二十世紀の10大ピアニスト』（幻冬舎新書）のなかのホロヴィッツの部分をベースにしているが、倍以上の量に書き足した。

収載するジャケット写真は石井氏のコレクションのもので、データも石井氏作成のものを基本にしている。